サイクリングについて　　西口正之

今まで僕はいろいろなサイクリングをやってきたと思う。クラブの合宿や、2～3人でのフリーランや、ソロツーリング等々。そして最も印象に残っているのは、3年の夏休みに行った北海道のソロである。サロベツ原野を1日誰にも会わず、もちろん誰とも口をきかずに走った時のことが忘れられない。空は今にも雨になりそうな重いくもり空で、風は真夏だというのに冷たく、朝なのか昼なのか、それとも夕方なのか、全然わからない天気であった。そして、稚内にやっとたどり着いた時、「なんて都会なんだろう！人間がたくさんいるぞ」と思ったりしたものだ。一人で走る時の

不安や、開放感を存分に味わった1日であった。もちろん風景の素晴らしさも忘れられない。そして、そういう、不安とか開放感や、何事にもしばられない自由さ、こそが、サイクリングの楽しさであると思われる。そこの空気にじかに触れて、草花の匂いをかぎながら旅を出来ることこそが自転車の最大の特長だと思えるのだ。そして、そういうサイクリングの面白さを一番引き出してくれるのが、ソロツーリングだと思われる。もちろん、複数の仲間と走らなければ得られない喜びもあると思う。でも一人でなければ感じることの出来ない喜び(苦しみ)もあるのではないだろうか。

サイクリストは観念論者で、ロマンチストで、夢想人であるのだから。